

古字書における反切・同音字注への声点加点について

佐々木 勇

一、本稿の目的

比較的古い日本漢音読資料には、漢字声調を示す声点加点がなされて¹⁾いる。その加点の中心は、平声・平声軽・上声・去声・入声・入声軽を区別し、中国中古音の全濁上声字が去声に移行している、六声体系である²⁾。

しかし、時代が降るとともに、平声および入声の軽重が区別されなくなり、ついには、伝統的な日本漢音声調を示す声点加点が見られなくなる。

漢籍訓点資料においては、鎌倉時代以降、軽重が次第に区別されなくなり、南北朝時代の後半からは、軽声点が加点されなくなる。そして、十六世紀後半には、声点を加点する資料は、ごく限られたものになる³⁾。

仏書訓読資料においては、漢籍訓点資料よりも早く、右の現象が進行したらしい⁴⁾。

一方、古字書は、平安・鎌倉時代においても、全濁上声の去声化が反映されず、中国中古音の四声枠を越えない声点加点資料が指摘されている。次のものである。

醍醐寺本『妙法蓮華經釈文』の掲出字声点⁵⁾

図書寮本『類聚名義抄』掲出字朱声点・反切字声点・朱仮名音注⁶⁾
高山寺本『孔雀經單字』鎌倉初期朱声点⁷⁾

これらと、室町時代中期の文明本『節用集』の声点加点が切韻系韻書の分巻にしたがっていること⁸⁾、とを結び、古字書・音義は、

上記の中心的な日本漢音声調を反映していないような印象を受ける。しかし、平安・鎌倉時代の古字書においても、平声・入声の軽重は区別されている。また、醍醐寺本『妙法蓮華經釈文』平安後期点でも、反切声点には、上声全濁字の去声化例が見られる⁹⁾。さらに、掲出字・反切字ともに上声全濁字の去声化例が存する、唐招提寺蔵『孔雀經音義』院政期点も紹介された¹⁰⁾。

このように見えてくると、規範的であると一般に考えられ、他資料と距離があるように思われている古字書にも、特に、反切・同音字注には、伝統的な日本漢音声調が反映された例を見出せるのではないかと期待される。

そして、この反切・同音字注への声点に注目すれば、古字書においても、伝統的な日本漢音声調が衰退していく様子を確認できるのではないかと、と思われる。

本稿は、以上のような見通しのもと、古字書における反切・同音字注の声点を調査し、その変化を見ることを目的とする。

二、反切・同音字注に声点を加点する古字書・音義

まず、古字書・音義における、漢字声調を示す声点加點の実態を、通覧しておきたい。

後掲表1は、その目的で、反切・同音字注を有する古字書・音義類のうち訓点加點資料に限って、管見の範囲で作成したものである（呉音読を中心とする資料は掲げない）。

表1によると、反切・同音字注に対する声点は、早くは、醍醐寺蔵『妙法蓮華經釈文』平安後期点に見られるものの、広くおこなわれたとは言えない。そして、室町時代には、姿を消すようである。

表1の範囲では、『妙法蓮華經釈文』平安後期点の後、漢音を示した反切に声点を加點する資料は、以下のものである。

唐招提寺蔵『孔雀經音義』院政初期点

圖書寮本『類聚名義抄』一一〇〇年頃点

改編本『類聚名義抄』諸本

高山寺本『孔雀經單字』鎌倉初期点

孫	思 ^(平) 渾 ^(平) 反	思 ^(平) 渾 ^(平) 反	思 ^(平) 蘇 ^(平) 反
難	乃 ^(上) 干 ^(平) 反	乃 ^(上) 干 ^(平) 反	中 乃 ^(上) 干 ^(平) 反
諸	之 ^(平) 如 ^(平) 反	至 ^(去) 如 ^(平) 反	弘 至 ^(平) 餘 ^(平) 反
經	古 ^(上) 靈 ^(平) 反	古 ^(上) 丁 ^(平) 反	中 古 ^(上) 靈 ^(平) 反
法	方 ^(平) 乏 ^(入) 反	方 ^(平) 乏 ^(入) 反	中 方 ^(平) 乏 ^(入) 反
掲出字	醍醐寺蔵『妙法蓮華經釈文』	唐招提寺蔵『孔雀經音義』	圖書寮本『類聚名義抄』
	(八七)	(四四七五)	(四五)
	(九三)	(四四七四)	(二八七四)
	(一一五)	(四四八八)	(二〇一)
	(一五四)	(四五二)	(一九四)
	(一五五)	(四六八五)	(二五九)

世尊寺本『字鏡』鎌倉中期点

天理図書館蔵『最勝王經音義』一三五二年点

三、反切・同音字注への声点加點法の変化

1. 醍醐寺蔵『妙法蓮華經釈文』・唐招提寺蔵『孔雀經音義』・圖書寮本『類聚名義抄』の比較

まず、初期の状態を知るために、比較的古い加點資料である醍醐寺蔵『妙法蓮華經釈文』・唐招提寺蔵『孔雀經音義』・圖書寮本『類聚名義抄』の反切・同音字注の声点を比較してみる。

左に、三資料のすべてに掲出され、かつ、反切または同音字注声点加點例を有する例の一部を掲げる。(挙例は、醍醐寺蔵『妙法蓮華經釈文』の掲出順を基本とし、圖書寮本『類聚名義抄』で同音字注である例を後にまとめた。圖書寮本『類聚名義抄』の(カン平輕)は、仮名「カン」が平聲輕の位置に加點されている例である。用例は、音注のみを簡略に掲げる。以下、同じ)。

勇	心	結	漏	羅	城	音	能	善	慈	說
餘 <small>(平)</small> 隴 <small>(上)</small> 反	息 <small>(入)</small> 林 <small>(平)</small> 反	古 <small>(上)</small> 屑 <small>(入)</small> 反	来 <small>(平)</small> 豆 <small>(去)</small> 反	洛 <small>(入)</small> 柯 <small>(平)</small> 反	石 <small>(入)</small> 盈 <small>(平)</small> 反	於 <small>(平)</small> 今 <small>(平)</small> 反	奴 <small>(平)</small> 登 <small>(平)</small> 反	常 <small>(平)</small> 演 <small>(上)</small> 反	似 <small>(去)</small> 而 <small>(平)</small> 反	始 <small>(上)</small> 悅 <small>(入)</small> 反
(二〇六)	(二二六)	(二二六)	(二一六)	(二一五)	(二〇二)	(二〇三)	(一九六)	(一九二)	(一九一)	(二七七)
餘隴 <small>(上)</small> 反	胥 <small>(平)</small> 金 <small>(平)</small> 反	古 <small>(上)</small> 姪 <small>(入)</small> 反	来豆 <small>(去)</small> 反	洛 <small>(入)</small> 柯反	石 <small>(入)</small> 盈 <small>(平)</small> 反	於今 <small>(平)</small> 反	奴 <small>(平)</small> 登 <small>(平)</small> 反	常 <small>(平)</small> 演 <small>(去)</small> 反	疾 <small>(入)</small> 之 <small>(平)</small> 反	始 <small>(上)</small> 悅 <small>(入)</small> 反
(四六二一)	(四五〇七)	(四五六六)	(四六七四)	(四六二四)	(四五三四)	(四七七五)	(四五六一)	(四六二三)	(四四七七)	(四五五六)
弘 <small>(上)</small> 勇 <small>(上)</small>	源為憲口遊 <small>(平)</small> 音深 <small>(平)</small>	音絜 <small>(入)</small>	音陋 <small>(去)</small>	洛柯 <small>(平)</small>	音成 <small>(平)</small>	弘 <small>(平)</small> 猗 <small>(平)</small> 金 <small>(平)</small> 反	玉 <small>(平)</small> 奴 <small>(平)</small> 登 <small>(平)</small> 反	弘 <small>(平)</small> 是 <small>(上)</small> 闌 <small>(上)</small> 反	弘 <small>(平)</small> 枝 <small>(平)</small> 茲 <small>(平)</small> 反	弘 <small>(平)</small> 始 <small>(上)</small> 悅 <small>(入)</small> 反
(二四五七)	(二三六一)	(三〇一七)	(三五六)	(二八六六)	(二一七一)	(二二六一)	(二三三四)	(二〇一)	(二三六六)	(七九一)

右の部分比較表の範囲では、醍醐寺蔵『妙法蓮華經釈文』は、反切上下字共に声点を加点している。これに対して、唐招提寺蔵『孔雀經音義』では、反切上下字の一方に声点を加点しない例が見られる。そして、図書寮本『類聚名義抄』では、右の中に、反切上字に声点を加点した例が無い。また、図書寮本『類聚名義抄』では、音が同音字で示され、その同音字に声点を加点した例が存する。右のような状況であるため、以下、反切上字・反切下字・同音字注のそれぞれを区別して、調査・考察する。

2. 反切・同音字注の声点加点数

鎌倉時代以降の加点数資料を含めて、声点加点数を整理し、後掲表2を作成した。

それぞれの字書の成立事情および祖本からの移点の問題があり、歴史的な把握は難しい。たとえば、『孔雀經單字』鎌倉初期点は、朱声点加点が一七一行目までで終わっており、参考資料にとどまる。しかし、以下に見る如く、個々の字書の成立・加点数事情を超えた大きな変化が存する。

図書寮本『類聚名義抄』と観智院本『類聚名義抄』との反切・同音字注の数は、反切・同音字注とも、観智院本の方が多_い。他の改編本も、観智院本とほぼ等しい。ところが、図書寮本と改編諸本の

反切・同音字注の声点加点数は、改編諸本の方が少ない(表2の水部および衣部における、図書寮本と観智院本の声点加点数を、参照)。

世尊寺本『字鏡』鎌倉中期点における反切・同音字注の声点も、院政期の字書と比較して、加点数は低い。

天理図書館蔵『最勝王経音義』一三五二年写本は、一三五二年時点における改編本『類聚名義抄』抄本と言える。掲出字は全一〇七八字、反切は四八七例、同音字注は全五六六例である。その中のごく限られたものに、声点加点が残存している。

天理図書館蔵西念寺本『類聚名義抄』江戸後期写本の声点は、位置が不明確な場合が多い。この声点は、祖本の機械的な移点によるものであろう。したがって、江戸時代まで反切への声点加点が意味を持つて行なわれていた、とは考えられない。

以上の事柄を考慮し、表1とあわせて表2全体を見ると、鎌倉時代に入つて反切・同音字注への声点加点は減少し、南北朝期には反切・同音字に声点を加点することが希になり、室町時代には反切・同音字に声点を加点した資料を見出しがなくなる、という流れが捉えられる。この点は、漢籍訓点資料と同様と見て良いであろう。

3. 反切上字・下字の声点加点数

『妙法蓮華経釈文』平安後期点では、反切に声点が加点されている部分においては、原則として、反切上字・下字ともに声点加点が見られる。

唐招提寺蔵『孔雀経音義』院政初期点における、反切声点の数は、次の通りである(前半部(意識字掲出部)の第一反切に限る)。

ア. 反切上字・下字とも加点する例——三三四例

イ. 反切上字にのみ加点する例——三二例

ウ. 反切下字にのみ加点する例——二六九例

アの反切上字・下字とも加点する例がもつとも多いものの、反切下字にのみ加点する例が二六九例に上っている。これに対して、反切上字にのみ加点する例は、三二例に過ぎない。

図書寮本『類聚名義抄』でも、声点が反切下字に集中することは、すでに指摘されている。

この図書寮本『類聚名義抄』においては、声調標示を兼ねた仮名音注が反切・同音字注に見られることもまた、広く知られている。その声調標示を兼ねた仮名音注は、反切には、下字に二九例存するのに対し、上字には存しない。

ただし、反切上字に仮名音注が書き込まれる、次の一例が有る。

如、旦、胡、又

(二七九三。便利堂複製本より複写。)

しかし、右例で、反切上字「旦」(『廣韻』去声字)の右横に書き込まれた「タン」は、声調は示していない。反切下字では、漢字左下に「コ」を書き、それによつて「胡」が平声であることをも表示している。

この、仮名による声調表示例も含め、図書寮本『類聚名義抄』全体について、反切の声調表示訓点を数えてみると、左の通りである。

ア. 反切上字・下字とも加点する例——二八例

イ. 反切上字にのみ加点する例——三例

ウ. 反切下字にのみ加点する例——七一六例

右の如く、唐招提寺藏『孔雀經音義』院政初期点よりもさらに、反切下字にのみ加點する反切例が高率である。

鎌倉時代初期加點の『孔雀經單字』において、反切上字への声點加點率が高くなっているのは、この音義が、「讀徒谷切（入／屋）」

(2)・「誦似^レ用切(去／用)」(2)の如くに、反切の後に掲出字声調と韻目とを記す形式を採るため、反切下字への声點加點の多くが省略されたためであろう。

以下同様に、改編本『類聚名義抄』諸本および世尊寺本『字鏡』等の声點加點数を数えた(表2、参照)。

なお、圖書寮本『類聚名義抄』は、和訓について、水部は^レ部以降とくらべ、部分的に声點を加點した「部分加點訓」が多いことが言われている⁽²⁾。そのため、表2では、水部と^レ部以降とを分けた。

また、觀智院本『類聚名義抄』では、圖書寮本『類聚名義抄』が引用する『倭名類聚抄』和訓への声點加點率が、水部では、糸・足・衣部に比べて、低いことが指摘されている⁽²⁾。よって、改編本『類聚名義抄』においても、水部とそれ以外とを區別した。

この表2を表1とあわせて見ると、鎌倉時代に反切下字への声點加點集中はさらに進行するものの、南北朝期には反切に声點を加點すること自体が希になり、室町時代には字書の反切に声點を加點した資料を見出しがたくなる、という流れが捉えられる^(2,3)。

反切上字への声點加點は、掲出字の輕重清濁を知るための補助であり、反切下字への声點加點は、掲出字の四声を知るための補助であったであろう。したがって、反切上字に声點加點が無くなることは、掲出字の輕重清濁を反切声點によって明示する必要が無くなったことを意味する、と考えられる。

4. 同音字注の声點加點数

各字書の同音字注への声點加點数も、表2に記した。

同音字注の数は、字書によって大きく異なるため、ここでも単純な比較はできない。

先に確認したとおり、圖書寮本『類聚名義抄』本文においては、反切注の数が同音字注よりも多い。ところが、圖書寮本『類聚名義抄』では、同音字注声點と反切声點の数は、ほぼ等しい(ただし、注文漢字への反切・同音字注は除外している)。よって、圖書寮本『類聚名義抄』における声點加點は、反切注よりも同音字注に比較的多くなされている、と言える。

改編本『類聚名義抄』本文では、同音字注への声點加點がさらに多くなる。(表2参照。天理圖書館藏『最勝王經音義』一三五二年写本でも同様である。)

以上から、本文が反切より同音字注を多用するようになることに対応して、反切への声點加點から同音字への声點加點へ、という動きがあったことは認めても良いであろう。

しかし、室町時代に入ると、同音字注に声點を加點した資料も見出しがたくなる。

四、古字書の反切・同音字注声點が示す声調

1. 輕声點の加點

『妙法蓮華經釈文』および『孔雀經音義』の反切声點と『廣韻』声調清濁との対応表は、すでに発表している^(2,4)。

『妙法蓮華經釈文』平安後期点の反切声點は、上字・下字ともに、

軽重をよく区別する。しかし、『孔雀経音義』院政初期点では、反切下字に、前代は平声軽点が加點されていたものに平声重点を加點し、前代には入声重点が加點されていたものに軽点を加點する例が多い。

『類聚名義抄』の同音字注平声軽点については、望月郁子の調査がある。それによると、「平声軽声の重声への合流」が、図書寮本においては20%程度、観智院本においては60%程度まで進行している、とされる。また、平声軽点の残存状況は、高山寺本・観智院本・鎮国守国神社蔵本の順に、書写年代が降るとともに低くなっていることも、望月によって指摘されている。

図書寮本『類聚名義抄』の声点を、反切下字と反切上字とに分けてみると、反切上字は平声・平声軽・入声・入声軽点の割合が高い。その結果として、軽声の比率が、反切下字声点に比べて高くなっている。これは、反切上字が、掲出字の軽重を示すためであろう。

ところが、世尊寺本『字鏡』鎌倉中期点で、軽点かと判断されるのは、「屹（魚乙）反」（一五六一）のみである。そして、天理図書館蔵『最勝王経音義』一三三二年写本では、軽声点が見られない。はじめに記したとおり、漢籍訓点資料においては、南北朝期後半から、軽声点が見られない文献が多くなる。これに対して、鎮国守国神社本『類聚名義抄』南北朝期点に軽点が残存するものの、世尊寺本『字鏡』のように、鎌倉中期点においてすでに軽点の例外的であるものが存するのは、字書の規範性—この場合は、韻書の声調との同一性—によるものであろう。

2. 上声全濁字の去声化例

一で触れたように、『妙法蓮華経釈文』平安後期点でも、反切声点には、上声全濁字の去声化例が見られ、『孔雀経音義』院政初期点には、掲出字・反切字ともに上声全濁字の去声化例が存する。

ところが、図書寮本『類聚名義抄』掲出字朱声点・反切字声点・朱仮名音注には、上声全濁字の去声化例が無い。この点は、本稿の筆者も、図書寮本『類聚名義抄』全体について同一の調査をし、確認した。

ただし、同音字注声点には、上声全濁字去声化例が四例存する。

①躡襪（音撰）（以下略）（三四三）

「撰」は、呉音で平声。

②補繕（類云善）音（以下略）（三三三）

「善」は、呉音で平声濁。

③方（磬）（順云俗音奉）強（一五六）

「奉」は、呉音で平声濁。

④桃花（石）（此間音道）卦尺（一四七）

「道」は、呉音で平声濁。

右の③④は、『倭名類聚抄』の音注を引いたものである。

③「方」は、日本漢音で平声軽であり、図書寮本『類聚名義抄』内にも平声軽点加點例を持つ（二一八五）。④では、呉音の去声を示すために、上声全濁字「奉」の去声化例が用いられている。

④「桃」は、日本漢音で平声である。④でも、「桃」の呉音声調去声を、上声全濁字「道」に去声点を加點して示している。

一方、図書寮本『類聚名義抄』の同音字注において、上声全濁字に上声点を加點する例は、一六例である。

高山寺本『類聚名義抄』でも、反切上字・下字には、上声全濁字

の去声化例は存しない。しかし、同音字注声点には、上声全濁字の去声化例が見られる。左のものである。

速 (音代^三又音弟^三) (二九四四) 娣 (音弟^三) (三四五五)

婦 (音負^三) (三六二三) 仗 (音杖^三) (二五八七)

遽 (音詎^三) (二九五二) 受 (音受^三) (二九一一)

嗜 (視^三) (三六九一)

観智院本および鎮国守国神社本『類聚名義抄』でも、同様である。

高山寺本『孔雀経单字』鎌倉初期朱声点にも、「近^三」(其謹切上) 隱^三 迫也幾也又巨斬切 (去/歛) 附也 (131) の例がある。「近」は、

上・去両声字であるが、『孔雀経』本文該当箇所は「新受近圓」で、

「近」は上声の意で用いられている。唐招提寺藏『孔雀経音義』院

政初期点でも、「近^三」(渠^三謹^三と)、(反^三)「(四五三七)」とあり、掲出

字去声点は、反切に依らず、読誦漢音声調における上声全濁字の去

声化が反映されたものと考えられる。よって、右の高山寺本『孔雀

経单字』の例も、上声全濁字の去声化例と判断すべきであろう。

世尊寺本『字鏡』は、標目字の声点および仮名音注に差声された

声点が、『廣韻』声調によく一致することが言われている。しかし、

つぎの例については、漢音声調を示すために、上声全濁字に去声点

が加点された、と判断される。

禍 (二二七六) 「「禍」の呉音声調は平声。」

視 (二二一一) 「「視」の呉音声調は平声。」

以上、字書においても、鎌倉時代までは、全濁上声の去声化例が、わずかながら、反映されている。

五、古字書の反切・同音字注声点が示す清濁

最後に、反切・同音字注に加点された濁声点について見る。

『妙法蓮華経釈文』平安後期点には、掲出字・反切・同音字注に濁声点はない。

『孔雀経音義』院政初期点でも、前半の意識字掲出字には、濁声点は見られない。しかし、反切声点および後半の陀羅尼掲出字部分には、濁声点が加点されている。ただし、その濁声点は、意識字を掲出する前半部分の三分の一あたり、「冒^三」(亡^三到^三)、(反^三)「(四五七七)」を最後とする。しかも、本資料の濁声点は、反切上字に九例、反切下字に十六例見られるのみである(すべて次濁字)。このように、『孔雀経音義』院政初期点では、濁声点加点が見られる範囲においても、その加点は徹底していない。

図書寮本『類聚名義抄』では、掲出字の濁声点は例外的であるものの、反切・同音字注には比較的多くの濁声点が存する。その反切・同音字注に見られる濁声点は、すべて次濁字への加点であることが言われている。

ところが、同音字に、つぎの例外がある。

琵琶 (順云毘^三婆^三二音) (一七〇五) 「「毘」——平声全濁字

絃管 (順云音与弦^三同) (三二〇三) 「「弦」——平声全濁字

極祿 (順云響^三保^三二音) (三三七一) 「「保」——上声全清字

右は、いずれも、『倭名類聚抄』から引用された同音字注の例である。三例目は、連濁例であろう。

これらの例は、中国中古音清濁と日本漢音清濁との対応原則に合わないものの、現実の音を反映したものであろう、と思われる。

その他の同音字注における濁声点は、日本漢音で濁音となる漢字

六一字に対して、加点されている。

ただし、日本漢音において濁音と判断される漢字に単点を加点した、次の二例がある。

磨磬（順云一音与麻^{（五）}籠^{（五）}同）（二五五六）

峯峇（一音額^{（五）}）（一三九四）

一方、図書寮本『類聚名義抄』の反切上字における濁声点は、日本漢音において濁音となる全二〇例に例外なく加点されており、単点加点例は無い。

図書寮本『類聚名義抄』では、反切下字の濁声点加點も、当時の濁声点加點としては高率である。しかし、次の各組左側のような単点加點例を含み、徹底していない。

灑（茲云所買^{（五）}）反（一〇四）

混（益云方買^{（五）}）反（五六一）

然（弘云呼没^{（五）}）反（二四九一）

紇（応云胡没^{（五）}）反（三〇二一）

以上、図書寮本『類聚名義抄』では、『孔雀経音義』院政初期点とくらべ、濁声点加點が高率である。特に、反切上字の濁声点に例外がないことに注目される。これは、反切上字が掲出字の頭音を示すためである。

改編本『類聚名義抄』では、反切上字への声点加點数が少ないため、下字との濁声点加點率の比較はできない。ただし、改編本『類聚名義抄』の反切・同音字注声点においても、次濁字以外への濁声点加點例が見られる。そして、それらは、現実の日本漢音を反映したものと解釈されている。

世尊寺本『字鏡』鎌倉中期点では、掲出字に比較的多くの声点が

加點されている。しかし、掲出字の濁声点加點は、日本漢音で濁音となる漢字に声点を加點した例の、半数に満たない。それに対して、反切・同音字注声点では、日本漢音で濁音となる漢字のほとんどに濁声点を加點している。よって、世尊寺本『字鏡』鎌倉中期点においても、反切・同音字注声点は、日本漢音をよりよく反映していると言える。

『最勝王経音義』一三五二年写本でも、反切・同音字注における濁声点は、日本漢音で濁音となる漢字七例全例に加點されている。六、まとめ

以上、古字書の反切・同音字注声点に注目して、その実態を整理し、考察を加えてきた。

その結果、つぎのことが知られた。

1. 掲出字に加點された声点と比較して、反切・同音字注声点は、日本漢音声調・清濁を反映した点が多い。
 2. 具体的には、反切・同音字注声点は、上声全濁字の去声化を反映し、高率の濁声点加點を行なっている。
 3. 少なくとも、図書寮本『類聚名義抄』までの古字書では、反切上字に、軽点をよりよく区別して加點している。
 4. 南北朝期の実態は、反切・同音字注声点加點資料および声点加點数が少なく、判然としない。
 5. 室町時代以降は、反切・同音字注への声点加點は、原則として、見られない。
- ただし、室町時代以降も、反切・同音字注がまったく機能しなくなっただけでない。

たとえば、尊経閣文庫蔵『字鏡集』一四一六・七年写本には、反切に仮名音注が加点されている。この字書では、反切に仮名を加点した場合には、加点することが原則の掲出字への仮名音注を省略する場合が多い。

それにもかかわらず、反切・同音字注に声点を加点し、それによつて声調を知る、ということが、室町時代以降、あるいは南北朝期の後半から、行なわれなくなった。

一方、掲出字の声点は、室町時代以降も加点されつづける。

字書における掲出字声点と反切・同音字注声点との相違は、掲出字に韻書の声調に基づく加点が多いのに対して、反切・同音字注には伝承日本漢音声調を反映した加点があることであつた。

ところが、その伝承日本漢音声調が、南北朝期には、あまり意味を持たなくなった。一例を挙げれば、前代まで詳しい声点加点がなされていた『佛母大孔雀明王經』の古訓点資料にあつても、高山寺蔵本南北朝期点(第三六函第一号)には、声点が一切加点されていない。

これらのことから、日本漢音声調の伝承途絶により、字書においても、漢音を示す反切・同音字注への声点加点は途絶えた、と考えられる。

表1

加點時期	通称(所蔵)	資料名	掲出字 声点	反切 声点	同音字 声点
1000年頃	醍醐寺本	妙法蓮華經釈文	○	○	○
院政初期	唐招提寺蔵	孔雀經音義	○	○	—
1100年頃	凶書寮本	類聚名義抄	△	○	○
院政期	高山寺本	倭名類聚抄	△	×	△
院政期	石山寺蔵本	香葉字抄	△	×	×
1114年	高山寺本	篆隸萬象名義	×	×	×
1124年	天治本	新撰字鏡	△	△	×
1187年頃	天理図書館蔵	妙法蓮華經釈文	×	×	×
院政末期	三卷本	色葉字類抄	○	×	×
鎌倉初期	高山寺本	孔雀經單字	○	○	○
鎌倉初期	高山寺本	類聚名義抄	△	○	○
鎌倉初期	十卷本(学習院大学蔵本)	伊呂波字類抄	○	×	×
鎌倉中期	観智院本	類聚名義抄	△	○	○
鎌倉中期	世尊寺本	字鏡	○	○	○
南北朝期	蓮成院本	類聚名義抄	△	○	○
1352年	天理図書館蔵	金光明最勝王經音義	△	△	△
室町初期	十卷本(大東急記念文庫蔵本)	伊呂波字類抄	△	×	×
室町初期	二卷本(天理図書館蔵本)	世俗字類抄	×	×	—
室町初期	伊勢十卷本	倭名類聚抄	△	×	△
室町初期	伊勢二十卷本	倭名類聚抄	△	×	△
1416・7年	応永本	字鏡集	○	×	×
1491年	延徳本(東北大学蔵本)	倭玉篇	×	×	×
室町中期	龍谷大学蔵	字鏡集	○	×	×
室町中期	文明本	節用集	○	×	×
室町中期	白河本	字鏡集	○	×	×
1556年	尊経閣文庫蔵	童蒙頌韻	×	—	—
1565年	二卷本(尊経閣文庫蔵本)	色葉字類抄	×	×	×
室町末期	音訓篇立	音訓篇立	○	×	×
江戸前期	高松宮本	倭名類聚抄	△	△	△
江戸前期	京本(鈴鹿氏旧蔵本)	倭名類聚抄	×	×	△
江戸後期	天文本	倭名類聚抄	×	×	×
江戸後期	京本(小島氏旧蔵本)	倭名類聚抄	×	×	△
江戸後期	西念寺本	類聚名義抄	×	○	○
江戸末期	二卷本(東大国語研究室蔵本)	世俗字類抄	×	×	—
明治期	前田本	倭名類聚抄	×	×	△

- 比較的多くの声点加點が存する。
△ ごく少数の声点加點が存する。
× 声点加點が存しない。
— 反切・同音字注が本文に存しない。

表2

加點時期	通称	資料名(調査対象部分)	掲出字	反切上字	反切下字	同音字注	対象範囲・備考
			声点	声点	声点	声点	
1000年頃	醍醐寺本	妙法蓮華経釈文	1099	429	421	5	全体(ただし第一反切に限る)
院政初期	唐招提寺藏	孔雀経音義	782	366	603	—	意訳字を掲出する前半
1100年頃	図書寮本	類聚名義抄(水部)	10	8	211	210	約60頁分
1100年頃	図書寮本	類聚名義抄(ㄱ~衣部)	14	124	633	614	約280頁分
鎌倉初期	高山寺本	孔雀経单字	253	8	16	1	全体
鎌倉初期	高山寺本	類聚名義抄	7	20	525	600	現存本の全体(人~田部の約206頁分)
鎌倉中期	観智院本	類聚名義抄(人~田部)	12	19	524	623	高山寺本対応部分(人~田部の約208頁分)
鎌倉中期	観智院本	類聚名義抄(水部)	0	6	26	70	水部(44頁分)
鎌倉中期	観智院本	類聚名義抄(ㄱ~衣部)	16	13	148	401	ㄱ~ト・山~玉・邑~衣部(225頁分)
鎌倉中期	世尊寺本	字鏡	686	18	95	100	全体
南北朝期	蓮成院本	類聚名義抄(水部)	0	6	29	101	水部(46頁分)
南北朝期	蓮成院本	類聚名義抄(ㄱ・言部)	0	1	18	48	ㄱ・言部(26頁分)
1352年	天理図書館蔵	最勝王経音義	0	0	11	31	全体
江戸後期	西念寺本	類聚名義抄	0	1	63	54	人(前欠)~女部(後欠)

注) いずれも、注文漢字に対する反切・同音字注は、除外している。

注

- (1) 沼本克明『日本漢字音の歴史』(一九八六年、東京堂出版)、参照。
- (2) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武蔵野書院)、参照。
- (3) 佐々木勇「『蒙求』における日本漢音声調の伝承と衰退」(「訓点語と訓点資料」第九九輯、一九九七年三月)、同「日本漢音の軽声減少について——漢音の国語化の側面——」(「國語國文」第七三四号、一九九五年一〇月)、同「日本漢音における軽声の消滅について——漢籍を資料として——」(「鎌倉時代語研究」第二輯、一九九八年五月)、同「清原宣賢の漢音声調——十六世紀前半の実態把握のために——」(「国文学攷」第一五四号、一九九七年六月)、参照。
- (4) 佐々木勇「日本漢音声調の必要性の低下について——院政期と鎌倉期の『大慈恩寺三藏法師伝』訓読資料を比較して——」(「國語國文」第七一卷第二号、二〇〇二年二月)。
- (5) 沼本克明「醍醐寺本法華經釈文の声調体系について」(「訓点語と訓点資料」第四八輯、一九九二年六月。後、加筆修正して注2著書に所収)。
- (6) 小松英雄「図書寮本『類聚名義抄』にみえる特殊な注音方式とその性格(上)」(「訓点語と訓点資料」第十輯、一九五八年十月)・同「図書寮本『類聚名義抄』における『正音』の体系Ⅱ」(『日本声調史論考』(一九七一年、風間書院) 第二部第2章)・注2沼本著書第二部第五章、参照。
- (7) 石塚晴通「孔雀經單字 解題」(『古辞書音義集成』17)(一九八三年、汲古書院)。
- (8) 湯沢實幸「文明本節用集の朱声点について」(「国語学」九一集。後、『唐音の研究』(一九八七年、勉誠社)に所収)。
- (9) 佐々木勇「醍醐寺藏『妙法蓮華經釈文』の声点加點について——前後半の相違と表紙見返中段記事の解釈——」(「訓点語と訓点資料」第一〇三輯、一九九九年九月)、参照。
- (10) 石塚晴通「唐招提寺藏孔雀經音義」(『北大国語学講座二十周年記念論輯 辞書・音義』(一九八八年、汲古書院) 所収)、佐々木勇「唐招提寺藏『孔雀經音義』院政期点の声調体系——反切を有する前半部分について——」(「国文学攷」第一六九号、二〇〇一年三月)、参照。
- (11) 本音義の書写・加點時は、本文・仮名の字体から院政期と推定されている(右注石塚論文)。本音義の朱声点は、意訳字掲出字には濁声点を使用せず、陀羅尼字と反切には濁声点を使用することから、本稿では院政初期点として扱う。
- (12) 望月郁子「観智院本『類聚名義抄』の正音注——同音字注における図書寮本との一致を中心に——」(「静岡大学人文学部 人文論集」第四十一号、一九九一年一月)では、言・糸・衣部においては、図書寮本—反切注四三六、同音字注二八一、観智院本—反切注五九一、同音字注六八五、とされている。
- (13) 川瀬一馬「古辞書の研究」(昭和二十九年四月、講談社)五三七頁〜五四一頁。西崎亨「天理図書館正平七年写最勝王經音義和訓のアクセント」(「訓点語と訓点資料」第七十三輯)、佐々木勇「天理図書館蔵正平七年写本『最勝王經音義』の性格——類聚名義抄諸本との比較を中心に——」(「鎌倉時代語研究」第十一輯、一九八八年八月)、参照。
- (14) その反切声点の助けによって、掲出字に声点加點がなされたのであるう、と推測されている。注5沼本論文、注9佐々木論文、参照。
- (15) この反切上字にのみ声点加點された反切の下字は、三二例中一七例までが入声字である。また、残る一五例も頻出する漢字である。おそらく、本資料において反切上字にのみ加點された例の大部分は、反切上下

字に加点するはずの下字声点加点が、加点するまでもないと判断され、省略されたものであろう。反切下字の入声字については加点が省略された、という考えは、注6小松著書一五四頁に、図書寮本『類聚名義抄』について記されている。

(16) 注6小松著書一四九・一五〇頁では、図書寮本『類聚名義抄』における反切への声点加点数を、次のような表現で示している(本稿本文と同様の形式で、私にまとめる)。

- ア. 反切上字・下字とも加点する例——「比較的少ない」
- イ. 反切上字にのみ加点する例——一例
- ウ. 反切下字にのみ加点する例——「右より」はるかにおい

(17) 注6小松論文。
 (18) なお、反切下字にも、声調表示をしない仮名音注が、三例存する。その反切下字と所在は以下の通りである。「俱」(一〇五五)「登」(二五二)「通」(三一七二)。ただし、この三例は、声点によって声調を表示している。

(19) 対象とする反切は、小松英雄『日本声調史論考』三七三・三七四頁において「第一群」と名付けられた音注に限る。この音注は、標出字の直下、あるいは、「又」として別音を注文の途中に記述するものであり、「正音」を表わしている、と一般に考えられている。また、注文中の漢字に対する反切への声点加点例三二例は、ここには加算していない。ただし、その三二例は、全例、反切下字のみへの加点である。なお、虫損のため、加点不明な「玉云勅」(高)反「(三一八三)」は、ここでは対象から除外した。

(20) 高山寺本『類聚名義抄』鎌倉初期点では、現存本の全体(人く田部)を対象とし、観智院本では「胡昆(毘)反」(佛九五四)とあるため、反切

下字に着くべき声点の誤写かと思われる「胡^セ昆反」(三二二五)を除外した。

観智院本『類聚名義抄』鎌倉中期点では、高山寺本残存部分(人く田部)および図書寮本の残存部分(水くト、山く玉、邑く衣部)を対象とし、高山寺本との比較から、反切下字に着くべきものの誤写と判断される「尼^ニ爾反」(佛三八四)、および複製本では下字の声点加点不明である「耽^ニ丁^ニ甘^ニ反」(佛一〇九七)を除外した。また、反切上字にのみ加点する例は、「呵^セ徒^セ反」(佛一〇〇六)の一例である。この例は、他の反切例と比較すると、反切上下字の間隔が広い。高山寺本では、「呵^セ徒^セ反」(三二八一)と、反切上下字ともに加点されている。観智院本該当箇所は、反切下字を誤写していることもあり、観智院本の声点加点者は、「呵」を同音字注と判断したものかもしれない。

鎮国守国神社本『類聚名義抄』鎌倉末期く南北朝期点は、高山寺本『類聚名義抄』対応部分にはほとんど声点加点が見られない。そのため、図書寮本『類聚名義抄』の残存部分である水く言部を対象とし、図書寮本では「識謎^シ莫^モ閉^ヒ反」(九四二)とあり、下字の去声点を誤って上字に加点したと判断される「謎^シ莫^モ閉^ヒ反」(二二七三)および反切下字声点が虫損のため不明な「汚^シ鳥^モ臥^ヒ反」(二六一七)を、対象から除外した。

(21) 注6小松著書第一部第3章。

(22) 望月郁子『類聚名義抄の文献学的研究』(一九九二年、笠間書院)一五八・一五九頁。

(23) このように考えられるとすると、図書寮本『類聚名義抄』は、水部では反切下字にのみ加点する新方式を採ろうとし、ノ部以下では、反切上字にも声点を加点する旧方式を比較的多く残した、ということになる。

(24) 注9・10 佐々木論文、参照。

(25) 注22 望月著書四〇〇頁、および同著書第二章。

(26) 右注著書三九八頁には平声軽点の可能性がある五例が挙げられている。しかし、いずれも重点と見て良いであろう。

(27) 注6に同じ。

(28) 『倭名類聚抄』の「俗」「此間」を冠した音注は、掲出字の吳音形と声調とを、注字の漢音によって示す例が大部分であることは、江口泰生「『和名類聚抄』の「俗」音注」(『国語学』第一四一集、一九八五年六月)に指摘されている。

声点については、馬淵和夫『和名類聚抄古写本声点本 本文および索引』(一九七三年、風間書房)では、『類聚名義抄』の原撰者が『倭名類聚抄』の声点を「証拠」としたであろうことが言われている。一方、注6 小松著書一六四頁では、和訓声点については、「典拠となった加点本のそれをそのままうつしとったものとはかんがえにくい」とされている。『倭名類聚抄』十巻本の東京大学国語研究室蔵本江戸初期写本に「俗云方（モ）馨（モ）」(六五ウ)、尊経閣文庫蔵明治時代写本には「此間音道（モ）卦（モ）尺（モ）」(二一〇ウ)とある。したがって、この二例は、『倭名類聚抄』訓点本の声点を移点したものかもしれない。

(29) 最終例の「視」は、『廣韻』では、上声・去声両声字である。ただし、醍醐寺蔵『妙法蓮華經釈文』・唐招提寺蔵『孔雀経音義』でも、上声加点例も見られるので、全濁上声の去声化例とも解釈できる。

(30) 沖森卓也「世尊寺本字鏡の漢字音について」(『築島裕博士還暦記念国語学論集』(一九八六年、明治書院)所収)、参照。上記論文には、仮名音注に差声された声点が示す声調は、七九・八%が『廣韻』声調に一致すること、標目字の声点も、七九・二%が『廣韻』声調と一致し、不

一致例は、吳音声調の混入であることが指摘されている。全濁上声字についても、去声点が加点されているのは、七字中五字に過ぎず、その五字の中にも吳音声調に基づく去声加点かと思われる例が若干あり、とされる。

(31) 世尊寺本『字鏡』は、反切上字に上声全濁字声点加点例が無い、反切下字に一例、同音字注にも二例存するのみで、いずれも一声点が加点されている。

(32) 『最勝王経音義』一三五二年写本には、上声全濁字の去声化例を指摘できない。これは、声点加点例が少ないためであろう。

(33) 反切字に濁声点が加点されていることは、注10石塚論文に指摘されている。

(34) これについて、注6 小松著書第II部第2章では、反切等注文の声点は、掲出字の大ぶりの声点とは別筆であり、別人によって後に加点されたものであるう、としている。しかし、原本調査の結果、そのようには判断できなかった。唐招提寺蔵『孔雀経音義』院政初期点と同じく、掲出字と反切等とは声点加点方式が異なっていた、と考えるべきであろう。

(35) 高松政雄「「正音」の清濁——名義抄の性格の一面——」(『国語国文』第四六巻一一号、一九七七年十一月)。

(36) 『倭名類聚抄』十巻本の神宮文庫蔵室町初期写本・東京大学国語研究室蔵本江戸初期写本に、「琵琶」に「毘（モ）婆（モ）」の例を見出せる。ただし、現存『倭名類聚抄』に濁声点を加点した例は無い。よって、『類聚名義抄』の編者が参照した『倭名類聚抄』に濁声点が加点されていたとは考えにくい。

(37) 注35高松論文。

(38) その例外となるもの一つに、「門（莫）奔（莫）反（莫）」(一九九二)があ

る。これは、掲出字の日本漢音が「モン」であるために、濁声点の加点を控えた例かも知れない。

使用テキスト(本文中の用例所在は、左の各複製本の頁数と行数とで

示す。左以外の表1資料は、複製本による。)

醍醐寺蔵『妙法蓮華經釈文』—古辞書音義集成4(一九七九年、汲古書院)。

唐招提寺蔵『孔雀經音義』—北大國語學講座二十周年記念論輯 辞書・音

義(一九八八年、汲古書院)および花野憲道氏から借覧したカラー写真。

図書寮本『類聚名義抄』—圖書寮本 類聚名義抄(一九五〇年、便利堂)お

よび原本調査。

高山寺本『孔雀經單字』—古辞書音義集成17(一九八三年、汲古書院)。用

例所在は、原本行数で記す。

高山寺本『類聚名義抄』—天理図書館善本叢書2(一九七一年、八木書店)。

観智院本『類聚名義抄』—天理図書館善本叢書32 33 34(一九七六年、八木書

店)。

世尊寺本『字鏡』—古辞書音義集成4(一九七九年、汲古書院)および原本

調査。

鎮国守国神社本『類聚名義抄』—鎮国守国神社蔵本 三寶類聚名義抄(一九

八六年、勉誠社)および原本調査。

天理図書館蔵『最勝王經音義』—原本調査および架蔵紙焼写真。

天理図書館蔵西念寺本『類聚名義抄』—原本調査および架蔵紙焼写真。

〔付記〕原本閲覧をご許可下さいました宮内庁書陵部・東洋文庫・

鎮国守国神社・天理図書館当局に対し、心より御礼申し上げます

す。なお、本稿は、第九十二回訓点語学会研究発表会(平成十七

年五月二十七日、於甲南大学)における口頭発表を修正したもの

です。発表当日、沼本克明・湯沢質幸・宮澤俊雅・池田証寿・

山本秀人の各先生から、有益なご意見・ご質問を頂きました。

ここに記して、感謝申し上げます。

〔おまけ〕 いさむ、広島大学大学院助教授

(平成十七年九月九日受理)